



子集  
子集  
之乃





續猿蓑集卷

春之部

花梅

温ふのあつさくおまぢたしん梅  
覆つふに又さつ月めさし  
顔めぬちの向ちあじさし梅  
ちう通舟木の般さつさつめ  
角の流しんまかめさつめ

花梅

其角

芭蕉

洞木

文子



花散て竹の軒のやまはら

酒堂

は貴なる酒をよめるて又君  
の血を七餅のまゝにねよ思ひ  
こゝろは

酒影をよめるの香きと空の花

惟然

晴みして霞をねりけりけり

支考

人のまをわく霞のしを川橋

沼徳

うらやめぬ中一のたの水面

様雖

七川より花をよめるは中か

陽和

さら新おのさるやを川橋

乙州

咲花をあらうきやる老木か

木呂

家もやあまのさるを川橋

沼荷

二の解れさる霞ゆゑの鼻

子珊

美玉のち方よあはれ橋の形

卓袋

田家

花若く弱のふおやせんかゆ橋

李子星

咲あはる花を飯まよ十石

拙翁

山行よ花もあらし木のぬき

一桐

たつた木の根やあらしのたのた

如雪

花をよまきて飯合世へ人を流

其角

これやうたまふ体をもたれたのま

一九<sup>年</sup>馬

ぬくまは世のまあしや軒の花

巨良

一月を花えのあつたはらぬま

花園

八重様よももあつたあつたあ

全

若菜

濡縁やみ跡もあつた上りつ

花雪

あつたの端やみ跡のあつたあ

曲名

夕波の舟もあつたあつたあ

孤屋

一かぬの牡丹もあつたあつたあ

尾頭

梅州柳

暮さつたあつたあつたあ

芭蕉

あつたあつたあつたあ

野水

守梅のあまひ業いりり野老賣 具用  
 里坊の確まゝやサシ丸の丸 高房  
 投入や梅のわきそ花のひき 良品  
 病傾のなまぬ梅のさかすか 曾元  
 あまひにぬまぬあまひに梅花 万平  
 梅のあまひ梅のほろろ下結の結 魚目  
 まゝ梅のあまひあまひあまひあまひ 千川  
 霞所や梅のあまひあまひあまひあまひ 大冊

天竺のやー海に流して

身あたままやろまや梅の難まゝん 遊系  
 ろれしは梅のなまやサシ丸 千那  
 時こそあまひあまひ川やりま 急え  
 ろろ道を教へりや梅花 李由 ト東  
 青梅のあまひあまひあまひあまひ 九之丸  
 端をうけてるあまひあまひ梅花 巴夫

鳥 附魚

きよよとせりあはるる ナラシ 其角

うらむとせりあはるる 史邦

きよとせりあはるる 智月

きよとせりあはるる 芭蕉

きよとせりあはるる 去来

きよとせりあはるる あ 西堂

きよとせりあはるる 傘下

きよとせりあはるる 長紅

燕や田をたりあつる鳥のあはる 野童

葉の中やあはる ツ年 峯嵐

雀の子やあはる 雛の棧 槐市

鶯うらにならる 子飼外 何瓢

けり鴨やあはる あはる 釣帚

あはる

鮎の子にあはる あはる 土佐

あけらあはる あはる 圃水

ま〜まのしほのしほのしほのしほのしほ

子珊

白魚のま〜まのしほのしほのしほ

山蜂

深川のま〜まのしほのしほ

ま〜まのしほのしほのしほのしほ

其角

十

お〜おのしほのしほのしほのしほ

正秀

お〜おのしほのしほのしほのしほ

け筋

お〜おのしほのしほのしほのしほ

羽紅

川流や波まやまららあ〜の角

猿雖

勇のま〜まのしほのしほのしほ

角指

味じや橋のま〜まのしほのしほ

車来

茨〜〜咲深のま〜まのしほのしほ

荒雀

堤ありららら〜まのしほのしほ

馬見

磯ありららら〜まのしほのしほ

拙作

ぬ〜ぬのしほのしほのしほのしほ

乃龍

早・藤やま〜まのしほのしほ

正秀

〜〜〜のしほのしほのしほのしほ

夕可

月の影よ猶の揺ちた櫻屋敷の  
浦の英やと葉のそとくつら花  
一桐

橘虫 附胡蝶

ふらふら月よりひびく橘の虫  
うぶ虫よめてや橘の盗喰  
探丸  
支考  
己百

白月志川うや

やまのりても翅を動かす胡蝶の  
柳梅

衣更るるのうきとやをきさ鶴の羽  
蝶の舞おつら様よこころあはれ  
惟然  
扇折  
ち羽  
二重の  
雪窓

春鹿

揺る揺るしりや鹿の角の角  
沢雉

五五耕

お福のちをあたへてさくらんぼ  
木立



苗れや山笠縫とよ此音月お  
千州乃田子あつはぢり遊ば人  
け筋  
平

柗 附椿

白柗や志州くも暮るるのを  
金柗をまこ蓋やり柗のそら  
依んくく葉柗の上の朧のを  
柗はくく申まもろまに柗のを  
菟さくふ柗や奇舞妓の脇躍  
柗隣  
介我  
雪芝  
水鷗  
其角

江東の寺中う祖父の懐のほろも  
わのし経文題めち川うー休庵の  
光のそよふ事

小服綿み光をやと路むほろに  
穂を枯てるふ花咲柗の中  
取あけてるらや柗のあそこの  
らと柗あまらもろに隣てるら  
角上  
砂香  
洞木  
野放

歎冬 附脚踏藤

山吹や垣み二十ころ葉一重  
園坊

田舎の人の對して

山吹も花もろく紫も花も辨りきん  
塙おとんはくは株や餅のあさ  
家時や穂妻よきくぬ家の花  
酒堂  
雪堂  
荊口

まら月

山の端まらくく只りのまら月  
魯町

まら月 附 春雪 蛙

拙よりい草のたとりやまらのも  
わさく調子合くまよまらのあわ  
まら月や唐丸あくらまら月  
龍口  
乃龍  
游刀

まら月かきくまら月かきくまら月

まら月や花も何らくくはひ  
ころもやえくくくくはひ  
佛もやもくくくくはひ  
りはくくくくくくはひ  
風暮  
桃首  
支考  
風暮  
風暮  
風暮

波千

乃ちあり枕の清海いさるれぬ返平水  
 去来  
 ふ川よ富士の麓やふ志おいの  
 園傍

雑春

出かこつやあしれ初らし加咄  
 許六  
 ささのさあしき舞ころ桐乃苗  
 風睡  
 心おこの松のろくろやわりう緑  
 土草  
 つけうのや麓の腰の柳ちか  
 肥力

わま花ちあはのころれや源治の家  
 一万平  
 あしぬに初海や思もや二市に申  
 玄景蘇  
 おの葉ころ雀あしあけとあ  
 坊水  
 まらのゆやさ糸のまの申れおきさ  
 正秀  
 とこの舞ころあころ申まらの池  
 仙化  
 りらむれ申のまらあし田園といり  
 支店

三月廿

勝くわよ白濁賣れ名跡うる  
 支考

業目

そよのやもた〜く〜上る歌 少年 武仙

遠返る年のす〜此立所外 百歳

そよや報と云〜ての里は〜 尚白

あはれ某のや〜つ〜は〜 塚の具 團扇

母あのみ〜も〜や〜 山嶺

あはれつらねを常を顛倒しと云ふ  
つらねと云ふ又の文のと云ふ一傳ぬ

えむやあ〜ら〜ん〜の〜 千川

人ともぬまらや境の〜花梅 芭蕉

あはれあのみ〜ら〜ん〜 其菊

様のおに〜は〜す〜つ〜や〜あは〜 岩雲

あはれあのみ〜ら〜ん〜の〜 去来

あはれに橋〜ん〜す〜ら〜ん〜 玉芳

あはれあのみ〜ら〜ん〜の〜 風騷

あはれ年一孫ま  
あはれ一けし

あはれあのみ〜ら〜ん〜の〜 猿蓑

子升のちをす川也 野やもさうくふ 鳥平

背さうくおのあまんまを花の 野

止園のまふたると句危の朝の 耕雪

縁の書具のをいままあまの 九板

く川其物もをさ後の中丘を 前川

枇杷のまふのうらな怪やぬあ 斜巖

世の業や髪もあれたともさ夷 山峰

濡いろぬ大あまのけのぬ日能 任行

えりやあまのうらまゆ梅のみ蓋 竹下

我や有まうくに鏡すまあたり 是乐

搦薬や蘇みのあまのぬる花志 沾圃

魚わいのる花目も似るり花うら 圃角

まゝ部

部

真角

曉の雲をほくもあつて

はくもよるもあつて

あつてはくもあつて

蜀黍の穂をぬくもあつて

あつてはくもあつて

雲の居るはくもあつて

ま

ま

ま

ま

ま

後集下

淀よりもたつてふなげし子親

けりたる山の極藤あて

順れり吹し海りらと也

神ふかきひの赤梅や申やとり

木 附 草花

橙や目みくらめれくらあま

里ししの次サうりぬを川あくら

園中 二句

治圃

園捐

野茨

は中のた本をい川れ掃のる

手切のきく木も掃のききふ外

娘百合や上よりさめは煉の系

豊山家く百合

あしちやあしちよき海らる合花

山もんよのくれてきやあしち

冷汁をあくさあしちり杜を

よのくくぬの像くぬし杜を

け筋

千川

孝龍

支考

尾頭

治圃

子か  
宇多都

後集下

いさゝかやあかしのたを先く

拙作

いさゝかやあかしのたを先く

盆うちや月をうらなもつた蓋

盆圍

夕顔や酔てうらな窓の尻

芭蕉

夕顔や酔てうらな窓の尻

嵐

藤の花あらくもあつら入にけ

妙香

葡萄の花に酔てし水の浮りけ

け筋

蓮の花あつらもあつら水離れ

魚書

客あつらしつる蓮の鏡あつら

良品

凡

朝露よのち死て啼く凡の玉

芭蕉

姫ゆきや袖あつてもうらな

至特

たん

蕭ねたりう膝をうらなぬ社舟

風弦

子蘭



後集

五

京入やうる舟の風柱の海ら申

毛崎 外七

早乙女も遊んでやうんまのふ

劇指

婦とら男の柱おくれうらあぢ

魚目

田植奇あてたら秋の風し

童り

一團はくしりあつりてやあのみ

水校

軍の子の燕振らあぢり

支考

雲

段き次の烟をくわうら

許六

之日月にまの雲を照みり

野菰

納涼

涼し物竹揺りり藪はく

半残

中葉花や、唐葉にわふり涼

唯然

海川の唐も帯して

くまの雲や風やふらり此の涼

史邦

涼し物如き花をての蓮も

毛崎

ふゆーや裏門明て夕涼

毛崎 牡年

後集

六

原一さし牛乳尾振て川の串 万幸

漫真 三句

腰かけて串に涼一と階子外 西堂

涼一とや縁より足まぬくまら 支考

生癖をゆらさくあしと涼くま 雪見

とまひとぬを

草屋よおひまて

涼風もあま一と登のこつれ外 游刀

いそか一爽中をぬけとら涼くぬ 全

立阿りく人よあまれてすまらぬ 去来

黙れよとまら涼くやるの上 正秀

穢人の帷子とまら涼くまらみ 工孝

涼一とや一まら穢の風もあまら 我眉

あ涼やとまらひのさそ月あまら 里圃

盛なる

かこもや照らあこまら一庭の偶 野萩

木子盛らとまらあこまら一庭の暑外 万幸

長門の者のさし見しとて一  
よそらに侍る

うまののやまを遠くして涼冷の思  
正秀

取替の河のあつとや梅はらひ  
乙州

煤とらち目盛らつ——  
怒風

女流の垣も志あつぬ暑う能  
素後

糸のさへも暑うさ月にはあつた  
我峯

はつよりやえ海をうらたはれちて  
平賀

積あけて暑うさやまたるも  
車谷

粒よなら飽もよおのあつとて能  
里東

ま茶をれさす川とてらやの暑  
佐圃

舟のさ  
可誠

昔に思つてさるく岸のぬるま  
曲聖

五月雨附夕立  
曲聖

あつたもあつたのちつたに徴の  
不三

さつたもあつたのちつたに徴の  
芭蕉

雑

北

み月もや瞳よみれぬ蟬はらむ

佐園

夕立よここし合まり月傘

拙依

白もや蓮の葉ふくむく池の

玄豆蘇

夕くらやうらうけくさ竹の皮

曉鳥

ゆめまね傘からさぬやまの所

圃水

蟬

白もや中房りて蟬のぬも

正秀

まゆめやむし蟬てきりりかき

胡故

森の蟬涼しよぬやうらむ  
蟬啼やぬの擲る雲のきりり

乙州

曉鳥

うらむ

花の月や潮こちるくち津波

葉拾

雑

夕立を掃いて月の動やせし團こな

枚風

雲の晴らふる葉やちやきり

荊口

くま獲と孫くひの申のちやうり

知真

後表下

北

川 結よらへ

あう焼や麦あへて海へ松籠 又鳥

異つる中にもあうらへや園の公を相 鳥下

夕園をあらへてもあう酒を 水鷗

あう酒をあらへてもあう酒を

魚あへる草もあへて造らへハ 馬見

梅すくも荒かへあへて目の面 子見

澤河や送付へ申らるるの面 野見

端中はのりあへてあへて 水鷗

吾の別名

あへてあへてあへてあへて 芭蕉

粘りな惟子あへてあへてあへて 惟然

貧僧のくもあへてあへてあへて

あへてあへてあへてあへて

あへてあへてあへてあへて

惟子乃あへてあへてあへて 支考

穂  
う  
部

名  
月

し  
し  
し  
し

名月に蘇麻の葉をた回のうら

名月のうらうらとて穂高

うらうらとて何葉のふ中みして名月の  
あこの二句をうらうらとてうらうらとて  
うらうらとて非うらんとてうらうらとて  
うらうらとて月をうらうらとて根のうらうら  
うらうらとてうらうらとてうらうらとて

後  
表  
下

下

くふと因位を——のめりりサレ  
群集をエカ様と云ふなりて平回  
渺しと見らるるを若杜る唯や  
あのみりらるるもつらんら  
↑—は次の櫛をけきさるる  
痛ふ——てふちやかりいら今の  
このお済の一番は候——月乃  
う——はよさちらちらら  
やらららにとおもひやんれ  
ハハよはむおの内に陰あつて  
Dante's Paradise to ...

き前の寂寞をいほ——ほと風無るま  
も——は五——何う是非を  
ま——の人の  
か——

支考評

名月の海より冷ら圓葉の影 酒堂  
明月やみよかぬを奴のつこ 知行  
とわしはん狼やせん月足み 孝の伝

おのちあひまゝにあらはるる月の

智月

あふ月やも名の陰まくのひ

園指

あふ月やふ科より花や中らる客

遠客

あふ月や一房の枝を陰もす

不玉

あふ月や梨の葉のほく月

配力

あふ月や葉のうららかにあつた

花板

あふ月やささるのねよ人もは

圃水

あふ月や氣もなしくてもめ

山峰

あふ月や花はぬまよきんきり

風園

あふ月や四又人糸一解ぬ糸

需笑

あふ月や老しと月の月も内て

童女

あふ月にかくせし一室に花衣なり

泥芥

いづれのうらなありてわすれの  
花よちいひまらた

あふ月やて花地も川ぬら月見ひ

支考

あふ月や子腐と烟まてりけり月見ひ

空牙

あふ月や柿のふれ又助とさるる月見ひ

知真



山々此らももほほめやいづの  
家比

名月や里のゆちひのまき  
木枝

場に居て月えかゝりて遠  
利合

明もやあしわかしに女中  
丹楓

明も何もあらうはあのお  
野萩

船入り客よもいづ川月  
正秀

修川のちよりのよ  
かよゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

舟りのるおこよけて月  
文子

待宵の月に床一や空  
景彬

家よら老女とらふきあり  
お監り細してはくは  
おねとひちて

姨捨

園よのちちりか  
依圃

露おきて月入あや  
馬芝

雪うゝ月まこめぬ  
里東

月影や海の方なり  
牧童

保川の東ふちねとよ所よ  
おとろーて

川ふちこの川きもや月のな 芭蕉

十六おちり川うら園のあめ 全

さよひの園のるもやういふた 俵維

カタ

うらぬの園のふのあゆの河 惟然

田舎まゝいもて終れ朝す 常々

船解のやとらうらあけの 東潮

まぢらういもて終れ朝す 園

船解のやとらうらあけの 乙州

立秋

あまぬうやうなよにうはとねの 落川

あまぬうやうなよにうはとねの 立次

籠

船解のやとらうらあけの 橋

船解のやとらうらあけの 立友



あさひの雲ふてきくはく極るな  
ふもあつはつとくちもて湯の舟  
朝空にまろれ——人お、髪髻帽子  
其角

虫 附鳥

さあ——此傍に経る時ひびく  
電馬也、朝よあつくぬらう棚  
火の傍て胸入す——く虫のさし  
秋の夜やまよと、野とさしこし  
このまや形よ、秋合——月の影  
杜若  
水鶴  
正秀  
水枝  
可南<sup>サ</sup>  
其角

鶴の何の味ある羊の先  
襦袢也、服もあつらふものと  
違ふ、夏に寝さうとん、解の  
ぬけあつよ、さしひて死る秋の  
厚手にゆき、く浦の苔をり  
鶴鴒也、きりま、は、宇川京  
葉の結ま、んあつ、は、時や、啼、鶯  
若の名は、さし、も、さし、て、四十、雀  
探丸  
葛葉  
示峯  
文子  
馬寛  
水固  
文子  
芭蕉

龍風

秋の物也二書回はるる龍風の時  
 雀子乃蟹もつとら也秋の風  
 何なりとあつちうしり秋の風  
 松のまふ也ゆきもの物也秋の  
 ちの二うしり平のまふもあふ外  
 ぬんまも也あつちうしり  
 あれしてまき海りあつちうしり

遊刀  
 式之  
 支考  
 風園  
 圃燕  
 九そに  
 猿雖

龍妻

独りてる守しものまじし龍の原  
 龍妻也まふ魚とまは海のと  
 明あつちうしりはるるの端  
 心那はま也園の方なり又位の

一東  
 宇比  
 玉女  
 芭蕉

木實 附 蒲

園のまふてあつちうしり  
 炭燈にほ拂たのまはるる

為有  
 玄鹿

山

山

秋の月和らるる尾折のり 酒堂

ほめしき雲をもろく梅の外 雲

ま川草也塩もも清尾一壺 酒圃

伊賀の山甲の河渡の  
字の底を録して

松茸也松のりりき山の形 惟然

ま川草也ま川草のま川草の 芭蕉

楓

後尾の堀よとれり村のま 水鏡

麻

麻すおにま川草の麻也清のま 風睡

麻からまよ麻おとる守りま 一敵

農業

起しおし人を迎はりまらまの 車庫

木の下に程おまらま種もつら 賞山

ま川草也ま川草のま川草の 知書

この場の半従ふ  
らうまをとりて

河津

あつたまのこころをたもてたたふ

芭蕉

早稲刈て落ちたうらやま百姓

乃龍

山雀のやまをいふおのの種

斗從

ふりよせに河原磯ふらやま

支考

一おれのまやまやまらん

全

肌をいぢりてありしまの

唯然

百なりていづくもたをたか

本之

大河河原のあつたまひて後次と  
つたまのこころをたもてたたふ

そのはらやまをいふおのの種

沾圃

菊

あつたま二百十日もさ

葛巨

あつたまのこころをたもてたたふ

留子

あつたまのこころをたもてたたふ

支考

題 益屏

あつたまのこころをたもてたたふ

兀峯

あつたまのこころをたもてたたふ

おろ子

暮秋

秋

七

唐の河や背負ふてゆる秋の暮  
野水  
り秋を鼓らうの京の恨、船  
乙州  
りあまやうきまおちけうる物果の  
芝蕉

雜稿

又六十海をほのめして般いせ一  
之道  
つ葉かゝれぬ家傳あし舟に松の中  
團友  
あゝ青鳥の啼きあちうつぬおきくうな  
睡止  
休る故や忘れぬ時をち秋の風  
はる

身ゆきひに霞のさちるく勅外  
萩子  
さうおや穠うぬさぬの葉おあ  
万幸  
柿のまゝに焼くを菓うんあ屋あ著  
葉門  
宗波  
むらう馬の密に骸骨あつくと  
の笛鼓ありまゝして能あとら  
そまを盡て舞あ屋の燈あし  
こまありああしにせああり  
あつめぬやとハあら此あああひ  
み孫あんやかの髑髏あを徒  
りあて孫あみあさあつあい

後集下



ひらいたちも只このまゝある  
まゝのまゝのまゝのまゝ

稲は花のちのまゝ

たしな

花のま

みくく部

何の附霜

ら北比の垣の路月也  
まらぬもまた松風の只まら  
りふらさ人も手もれ  
一時もあさく河まらく  
ゆーらぬ少端の草花者加減

野坡

水枝

芭蕉

露沾

馬草

平押ふみ及回らむら時あふな  
 葉土賣也らくまらぬの葉廻り  
 梳賣ももよき身勝の如時あ  
 元鯉のちてきりぬ時あふ能  
 うらむねや鏡あつら一しらぬ  
 ぶよ並て赤野をぬら時あふ  
 柿包し目あゆかきやあふ能  
 ちししりまらぬて里を痛時あ

野明  
 園指  
 空牙  
 ぬ有  
 鶏口  
 野萩  
 赤川  
 里圃

沖西の能目らりあは時あふ能  
 うらむねやたのぶあふ能の端  
 あらむねやしらぬと能の端

佐圃  
 水鯉  
 支考

え禄幸圃くぬあふ  
 九月まの重と菊園と遊

重の重まぬあふ月のみぬ  
 ちししりまらぬと能の端  
 ちししりまらぬと能の端

あゝ〜時分を傷とらふはたゞ  
あゝ〜川を展座物の〜め流  
た〜〜もめ〜はきや〜  
あゝ〜〜〜〜〜

芭蕉

あゝ〜や〜座よ切らるる後の座

柚の色や起あがりらるる葉の香 其角

あゝ〜の氣味ぬらふ境や萩の 柳隣

あゝ〜の〜やあつあつらるる葉の香 沼圃

何處のあゝ〜〜にまん葉の枝 魚之江

あゝ〜の香も園をまはり 馬寛

葉葉の隠土可〜のぬら〜  
あゝ〜の〜も輪のち〜んま  
あゝ〜の〜も〜も〜も〜も  
〜〜〜の〜も〜も〜も〜も  
あゝ〜の〜も〜も〜も〜も  
〜〜〜の〜も〜も〜も〜も  
あゝ〜の〜も〜も〜も〜も  
〜〜〜の〜も〜も〜も〜も  
あゝ〜の〜も〜も〜も〜も  
〜〜〜の〜も〜も〜も〜も

くろくくとぬ響くや作ぬ響のなまき

草 附木

みねや孫唄りぬ 月の透り 曲翠

みねは清く 咲や草ふわりの水は花 水固

みねのうたのこゝれや蘇る 唯然

花見録 趙南の

山家集の 題よ

一葉もくちりぬ 春の氷く 芭蕉

山さか花をえり 開くゆり花 車廂

みね梅のちと川ゆり川や鳥の 土佐

みね葉もくちりぬ 春の氷く 芭蕉

木さか 附冬枯風

みねは清く 咲や草ふわりの水は花 依徳

みねは清く 咲や草ふわりの水は花 露沾

みねは清く 咲や草ふわりの水は花 唯然

藤より足さつりあつたあの手外

枳風

たけなすの

たけなすの

さつらあり先れてさつらあまの

一道

枯さつてあまのさつらあまの

杉風

牛のり送る枯葉のさつらあまの

柳醉

冬枯にさつらあまのさつらあまの

乃龍

冬枯にさつらあまのさつらあまの

利半

即ち枯てのさつらあまのさつらあまの

支考

木がさつらあまのさつらあまの

智日

風也背中吹るさつらあまの

風竹

木枯れ刈田の畔のさつらあまの

惟然

さつらあまのさつらあまの

塵生

夷講

さつらあまのさつらあまの

芭蕉

さつらあまのさつらあまの

利合

鳥 附いま

乃々の海まゝ

塵埃よめぬ目もぢー浦歌 白空

追うけて意よころか千もりの浦 葛原

かおちとると庚申やら花あを形 ぶき

入海や碇の笠に啼ー千を 園坊

敵テコロモにほゝめてぬくー鴨乃豆 芭蕉

と川鴨を大追うころはほゝゝゝ 乍木

枚はよころひ入つよと海嵐を 三人 利雪

ううしやと海月よまゝあらちよの 車庵

えく透や子持ひ女のうに氷 岱水

一塩よと川魚や舌の前 杉風

かくぬけや腹をぢーして降雪 拙作

杜夫魚を河豚の大ききとて水上はあふ  
那の川よのくあるくまやう

冬月 附今

後集下

三

管ものやの賣ありくみの月  
あゝ猶のかけおは軒やみの月  
何まよと痛ふらまてやり紙ぬす海  
ふんぬや行をぬれは江の月お  
支考

埋火

埋火物母らお客の歌あり  
佛一さるおと志をぬらう火燈  
自由と物月もぬれはまを燈  
芭蕉  
桃先  
同木

雪

ゆき物行に檜あり夕るる雪  
お〜〜〜 月雪うすき酒の味 全  
雪あ〜〜心の〜〜をさか  
鳥驚くゆきと〜〜〜雪  
雪垣や志〜ぬ人ぬ雪あめ  
ぬ〜つ子も〜の鞋をぬれぬの  
片羽らぬ雪降からすき徳 圃吟

後接下

共

馬のしんりのまゝんや月枝のあけ  
髪利を降り来るまゝのけ  
伊加久大和のまゝのた  
配力  
陽和  
太早

神樂

お中系に萬もかゝるあなまの  
史部

神さゝよ

倉付や、りりりりりの神  
神あゝた干舞をすちりり  
娘入のりもさゝと降さゝよ  
痕を送りくたし舞  
路平  
馬見  
許六  
佐團

煤掃 附舞

煤掃やあゝあゝあゝあゝあゝ  
才是る儀のかや煤えん舞  
孫香  
黄逸  
深灣  
馬見



蝶々もやわらぬてあつた

白如

蝶掃也折ぬ一牧臨く

惟然

餅つふや火事かそち男を

伝水

餅はあつたあつたあつた

嵐草

ゆら揺の手傳ひもあつた

馬佛

歳暮り 附言書に衣配

とあつた返もあつたの市のは

魚丸

所砂やあつてあつたの洗ひ髪

里東

賣ふやとあつてもあつた

草土

袋もあつたあつたあつた

車美

大子や親子きききき

万平

袴もあつたあつたあつた

孝由

年の市作もあつたあつた

具角

おろちんあつたあつたあつた

正秀

川流あつたあつたあつた

秋子

桶の輪のあつたあつたあつた

猿鉗

天鵝毛のさしぬさあして海のき

惟然

後秋よ葉も枯れしや  
C. 10. 10

けろを圖司呂丸うねる宮ありあはれ  
のちろとて伊勢もしあして侍らぬ  
いそいそとてのちろあはれもせし  
あして今もあはれ  
くさるる

盗人のあめこあもあつ年のき

芭蕉

余所よを傳てんすのあはれ  
のき

支考

漸にを傳所あはれぬ年の甲

土考

昔もよゆ弱りてゆら森の中

尚白

昔もよゆの拍子あはれすのあはれ

柳後

裁る宿を束の子らと川きぬ配

山峰

一志をいふて静る  
陰のわの鶏

利合

雑文

巾原風に葉を挽くら葉さし

軒崖

拙作よ何風を吹く一なる端

玉芳

井のあらのあはれあはれあはれ

孝下

仙杖  
 仙圃  
 雪堂  
 山谷  
 仙圃  
 杉風

釈教之部 附 追善 哀傷

涅槃木

涅槃木像ありよき身も同なり  
 福とん命和般手合の瑞彩の  
 山寺や猶守るに居るねまの像  
 貧福のあらしは山寺なるに涅槃木像  
 仙圃  
 芭蕉  
 不撤  
 山鐸

灌佛

権仰やけし〜あ〜物ら井戸の や  
 家花や仰うまゐて二と目 不玉  
 権仰や親迦と程婆を従弟と  
 之道

云鬼冬

冷物も〜な水と〜〜〜〜〜  
 毛保りたりのか〜〜〜〜〜  
 やは休物坊〜〜〜〜〜  
 嵐野  
 去来  
 法圃

甲戌のな大津よ侍〜ま〜の

か〜の〜い〜より消息〜〜〜  
 と〜〜〜よ〜ゆりて盛會〜〜〜

〆〆〆〆〆〆なほよき〜〜〜  
 芭蕉

悼少年 二句

う〜〜〜〜〜  
 その親をきりぬ〜の子を秋の風  
 唯然  
 支考

香の〜を〜稀〜  
 不羸

〜〜〜に訪て

くろふや 輪妻やと皮桶の水 支那

佐敦海

柚も柿もおくまぬめなり 佐敦海 佐園

臘八

鰻よとくろりてくろぬ豆汁 許六

何のあれかのあどろくまを大呼海 知行

雑髪

洛東の真如堂に

善光寺如來開帳の時

涼しくも野山よもはるふ外 去来

みづもやまもさき二にきりけり 智月

りー畑や家き川よりて仏在世 乙州

ものふに川趣向小や富さき 三和子

手まきーに朝の月涼 野坡

食堂に少佳啼 夕時 支考

旅之部

送別

え禄七手のまゝとて  
あまを送るて

あまぬくに降るる世のふりね

荷号

あまを柿喰ひあまのちのど

惟然

許六

本巻海にわらわし

旅人のちるはとも似よ椎のた

芭蕉

留別

後の惟然々空あり

右帰のゆるけ

嵐や〜のあきの草むらさか〜り

文子

鮎の子にま〜る魚送るふのり

芭蕉

甲斐の〜のぬよはらけ

〜の〜の〜の〜

手ありて牛に乗り〜り〜り

木暮

穂つほの〜は世をた〜る

越人

み〜も〜〜つる〜川保和旅の骨

野狂

あゝの國のおも〜

〜の〜の〜の〜

るれ〜を谷地なり〜り

公卿

十國の〜のわは〜ぬ

許六

大名の〜のりにも〜る

全

〜は〜

〜も〜も〜も〜

魚丸

は〜〜を〜て〜

猿轡

明ちの〜を〜る

我峯

おちるまはまてゆかあり 一 鳥の鳥 史邦

田園の心さきし世術くし伊勢の  
くあくあつて

又彦の之庵あつてけき 秋涼 立人 呂丸

我 蒲園 一 一 旅の遠く能 佐園

常陸の園ありあひとらふ新よ  
おまらてやとりあんととと一に  
そのまをま後まあまてちんま  
くまをくまを一お別時の野の  
下にかつあり 一 一 一

根のち味ら情や梅にせは 粥 支考  
と川魚や道よとらふ 枝もと 全

え禄とまのあま 葉はのま  
ありまにまおまらくして  
の驛 塚をまらに

宿かりて名をたの 一 一 一

一 一 一



續猿蓑を芭蕉翁乃一流り申し  
何人の機をいふも志しに為す世の  
情伊美と形を乃見れ尾をふし  
此神子あり一果をうらむを結て  
漸む一果本のむらな申をかくん  
世に廣くあつとゆるし一松より書中  
或いふ言けしあるいふ入ふれり  
く結らばる平稻のすまふにあり

後接下

一字はくはす一好とありたは可しん  
可書くはもはるゝと並に板の  
とがとあし

早八終

え祿十一寅

からか

に三木



又日去。



